



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	クリスチャンパーソナリティ 論形成への実証的研究
Author(s)	中村, 陽三
Citation	基督教学, 5, 23-25
Issue Date	1970-10-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46262
Type	journal article
File Information	5_23-25.pdf



クリスチャンパーソナリティ論

形成への実証的研究

― 学校集団における調査報告 ―

中 村 陽 三

一、本調査報告の前提的理論

昨年、筆者はハキリスト教々育Vというカテゴリーに対して科学性や実証性を与える理論としてパーソナリティ論を軸とした一試論を発表した。その理論的根拠は、信仰が八人格的自我の全体中心的活動VであるというTillichの考えによって personality という人格概念を援用することにより、発達性のダイナミズムや、中心的習性と考えられる人格構造を科学的にとらえられるという主張によっている。筆者の主張の発想過程はパーソナリティ論を検討し前述の根拠によってクリスチャンパーソナリティというカテゴリーを定立し、その定立の根拠を

設定し、又、その領域を考えることにあった。本調査報告はそこで提起された若干の課題の中の何点かを分析するという意図によってなされたものである。

二、調査の内容と方法

前述の根拠によって本調査で分析しようとした諸点は次の如くである。

1 クリスチャンパーソナリティの成長、成熟にかかわると考えられる宗教意識の実態の分析

2 クリスチャンスクールという学校集団を通じて、学校の実施する宗教々育の方法又は制度が、生徒学生のクリスチャンパーソナリティの成長に如何にかかわって

いるのかという事柄の分析

さて、私が調査対象として選んだのはプロテスタント系の札幌北星学園女子中学高等学校の中学三年九四人、高校一年九四人、高校二年一〇九人である。被調査校には中学三年二四二人、高校一年三〇一人、高校二年二八一人の生徒がいるが、被調査成員がすべて同じ宗教々育の制度、方法をうけているという事情によって、各学年から無作為に二学級を抽出して、四〇分の時間を与えて調査用紙に記入させ、回収するという方法をとった。

3 調査報告

まず、若干の Face Sheet を示すと、I では「無宗教」が M 352.1% H 171.2% H 274.3% であり、II では「どちらでもキリスト教でない」が M 387.2% H 191.4% H 298% であり、IV では「洗礼を受けている」が M 33.2% H 13.2% H 26.4% という集団である。

さて、記入の手引その一にある質問項目は二九あるが、その調査の分析視角は次の通りである。Q1～Q6 キリスト教的宗教意識尺度、Q7～Q9 神意識尺度、Q10～Q29 信仰意識尺度、まず、キリスト教的宗教意識では

「神の子」認識は高いが、それを裏付ける奇跡、再臨に對しては仲々信じにくいという結果がでている。次に、神意識では何れも賛成群が多く、相当理解されていることを示している。又、信仰意識尺度では、知的理解に於いて何れも相当進んだ理解をもっていることを示し (Q10, 14, 17～21, 28) 信仰の発達性の理解では、子供の信仰も大人の信仰も同じ性質のものと考えている者が多い。(Q25～29)

続いて dynamic な学校生活との相関の中で、personality の成長にキリスト教がどうかかわるかをみる為に記入の手引その二を設問した。その結果、全生活の中で、大半の人間が、信仰を考えてみようとしており、又聖書のことばが大切な判断のよりどころとなっているのは半数である。又、人格形成に関係をもつとするのが H1, 2 で 40% を示している。しかし、教会へ行くこと、学校の礼拝などについては、半数が反撥を感じている。

(Q30～35q1) 次に礼拝の説教では四〇%～六〇%が感銘した話をきいており、クリスチャンスクールで学んでいることについて四〇%～五〇%がよかったとして

いる反面、聖書や礼拝の時間が魅力がなく、又聖書の真理と他教科の真理との間に矛盾を感じている者が多い。

(Q35 q3～Q41) 続いて Case Study として個人的な生活の process をきく為に Q42～Q44 を設問した。その結果、例えば罪の意識については四四%～七一%がもつたことがあるとしている。又、どの程度キリスト教を将来の自己の生活の中に位置づけようとしているかをみると Q47～48 を設問したが中間の答が多く全体傾向をとらえることはできなかった。総じて、本調査の結論として次のことを付記しておきたい。

1 クリスチャンパーソナリティの成長にかかわる諸要因、動機、宗教意識の型については

(i) 成長を助長する factor、動機は OA にみるように様々であること。

(ii) キリスト教的価値志向はほぼノーマルな型で成長していること。

2 宗教々育の制度が如何にパーソナリティの成長にかかわっているかについては

(i) 礼拝、聖書の授業が他教科と有機的に結合される

必要があること。

(ii) 生活次元の中での道徳教材として、聖書を考えている者が多く、道徳教育と宣教という二目的を宗教々育のダイナミズムの中で位置づけることが要請されていること。

参 考 文 献

「基督教主義学校における生徒の宗教的発達」(宗教々育実態調査報告) 基督教学校教育同盟刊行 一九六五。
「西欧と日本の人間形成」牛島義友著金子書房 一九六一。
尚、詳細な報告内容については日本基督教々育研究所に提出してあるので参照されたい。